

宗長連歌自注

— 諸本および成立を中心に —

重 松 裕 巳

——宗長は古今伝授したれどもあまり念をいれなんだなり。我は連歌しにてこそあれ道をつたへてなにすべき事にもあらず。連歌のつけあちだによくばというてあまりかまはなんだとなり。

一、天満宮本・京大願原本

耳底記——

「宗長連歌自注」(以下連歌自注と略記)は、宗祇没後の連歌界の指導的な地位にあった宗長が、自句の中から付句(二句一連)一九九句、発句三〇句をえらんで各句に注を施しながら、連歌の本歌本説や寄合付等について教示した書で、興津藤兵衛尉正信宛のものと、壬生下総守綱雄宛^(注1)との二部からなる。この書については、すでに「桂宮本叢書第十八巻連歌(一)」に「他に所伝をきかない孤本」として翻刻紹介されているけれども、管見に入ったものとして他に次の二本がある。たゞし二本とも興津宛連歌自注で、壬生宛のものは含まない。以下、こゝで扱う宗長連歌自注とは興津藤兵衛尉宛のものをさす。

その(一) 大阪天満宮文庫蔵本

大本(二一×二六・三)一冊。濃茶表紙。題簽に「柴屋軒宗長隨筆」とあり、その右にやゝ細字で「山田のすさみ」と併記。

内題なし。墨付八三枚。近世初期写。付句一九七句(春二一句、夏九句、秋三一句、冬二〇句、恋二九句、雜八八句)、発句二八句。

その(二) 京都大学願原文庫本

枳形本(一五・五×一六・〇)一冊、薄茶表紙。左肩に題簽の剝離したあとあり。その上に墨きで「貞徳筆」とある。内題なし。墨付六八枚。付句一九九句、発句三〇句。

連歌自注三本の字句の異同については、後に校異表に示すとおりであるが、この表から以下の事が明らかであろう。本文における字句の異同は、かなり多く認められるものの、それはテニヲハや末梢的な語句程度のもので、全体的にはほぼ一致し、文意に影響を与えらるほどのものは少ない。しかし、三本間に直接の親子関係は認められない。次に、全体の校異項(本文のみ)五二四個所の中、(イ)桂宮本と京大本との合致率を百分比で示すと二三%(ロ)天満宮本と桂宮

本との合致率は一二% (ハ)天満宮本と京大本とは四〇%であることから、天満宮本と京大本とがもっとも近く、ついで桂宮本と京大本、第三に桂宮本と天満宮本の順となろう。さらに、桂宮本にみられるイ本の注記から考察すると、桂宮本にもっとも独自異文が多いといえる。

ところが、三本は以上のような関係にありながらも、全体的な面からいえば、(一)京大本・天満宮本は桂宮本に対して 1、部立を設けない 2、排列(四ヶ所)の二点において異なり、(二)天満宮本は京大本・桂宮本に対して 1、跋文 2、脱落(あるいは省略か。七ヶ所) 3、評語「ゆう」の三点について独自の性格をもっている。

上述の諸点から総合判断すると、桂宮本と天満宮とが両端にあつて京大本はその混合本と考えておきたい。なお、さきに桂宮本は多くの独自異文をもつと述べたけれども、これは底本を再検討することによつて多少訂正し得る個所があるかと思われる。つぎに、天満宮本の「跋文」を本書の成立問題とからまねながら考察してみよう。

桂宮本・京大本の「跋文」

(×は京大本ナシ)

愚句寄合付の事数年承候、さらにいづれを、それともいひかたくは待れと、此度熱海湯治中、いさゝかつゝしるしあつめ、又こゝもとまて此此の愚句中、かならず寄合とはなれと本哥などをよそ書加候、老かおほえの事のみおほかるへく候、比興々々
興津藤兵衛尉殿
宗長判

天満宮本の「跋文」

此一冊は駿河国興津名字の若きあり、六七年かけて愚句の心を聊見えししてと懇望せしを、とかくして去年の夏六月、伊勢山田

逗留の筆のすさひに書てつかはし侍り、いかゞして爰元までちりほひのほりける事也、はつかし、比興々

十一月二日於有馬湯治書之

宗長

二、連歌自注の成立

本書の成立は、桂宮本叢書解題に、発句の部巻頭の「七十の春をのみつむわかなかな、七十のいたつらに年をのみつみ侍る事のみなるへし」に徴して、宗長七十歳永正十四年正月以後の撰注との目安をたてられている。ところが、同じ発句の部の「有明や空に霜かれの花すゝき」の句は、大永三年冬、有馬の児屋寺での詠であるから、永正十四年よりさらに六年降つて大永三年宗長七六歳以降の成立となる。

こゝで天満宮本の跋文にかえてみよう。

右の大永三年の句を基点に考察をすゝめると、「去年の夏六月、伊勢山田逗留」は大永二年七月の伊勢下向を指しているのではない。つまりこの年宗長は宇津山の草庵を五月に出発し、小夜の中山、浜名、勝山、荻屋等を経て七月下旬伊勢に到着。そして八月四日から五日間に亘つて伊勢千句をまいてゐる。八月十六日まで山田滞在ののち、越前朝倉教景の許を過ぎして出立したものの、途中亀山で戦乱にあい、九月一日再び山田に引き返し、以後十月までは一ヶ月滞在。宗長の伊勢下向は前後六回を数えることができるが、戦乱に妨げられるという事情はあるにしても、このような長期滞在はこの回限りであつて、「山田逗留の筆のすさび」の事情は大方察せられると思う。

次に、「十月二日於有馬湯治」に触れてみる。

翌大永三年三月上洛して三条西実隆に謁。四月十一日、紫野大徳寺山門造営の出費を仰ぐため越前朝倉教景の許へ下向。大任を果しての帰洛は九月中旬。のち江州観音寺、志賀、京四条坊所などで発句詠。冬には有馬湯治。こゝで「有明や空に霜かれの花すゞき」を詠む。再び酬恩廊にて越年。翌大永四年四月十一日駿河帰国のため離洛。以上大永二、三年の宗長の動静を追ってみたが、跋文の「十一月二日」の「有馬湯治」は、山門造営費勸進に奔走し、その大任を果した後の有馬湯治であるとは必ず断定できるものではあるまいか。

しかし、このように「伊勢山田逗留・十一月二日有馬湯治」を一応の結論に導きえても、なお一つの疑点がのこる。それは「去年の夏六月」である。現存資料によれば宗長の伊勢下向は、上述のように長享二年七月(注5)(四一歳)、延徳二年(注6)初夏(注7)(四三歳)、永正二年六月頃(注8)(五八歳)、永正十三年六月末(注9)(六九歳)、永正十六年八月頃(注10)(七二歳)大永二年七月下旬(七五歳)の、六回を確かめうることもできる。その中で夏の訪問は二、三、四回のそれであるけれども、かきに本書の執筆の上限を七〇歳におき、前年の伊勢下向の永正十三年六月末を採るとしても、永正十四年中に「有馬湯治」の記録を見いだすことができない。とすれば本書の、発句の部の例句をもっとも有力な資料として、「去年夏六月」は宗長の記憶違いとするか、又は、新しい資料を待つ以外にない。

こゝで桂宮本、京大本の「跋文」に戻る。例句に大永三年の発句を有する以上、こゝに云う「此度熱海湯治」も大永三年以降となるわけだが、宗長の熱海湯治は、生涯を通じても享禄三年十二月一日（生亡）（八三歳）、死の前年享禄四年六月頃の二回に過ぎない。壬生下総

三、評語「艶・ゆう」

本書には「おもかげ」「余情」「有心」「幽玄」などの評語がみられる。いずれも中世の歌論、連歌論の枠を出ない評語で、そこにおのづから宗長の連歌理念、文芸意識の志向するところを探ることゝ可能であるが、これについては稿を改めて論じたい。こゝでは評語の一つである「艶・ゆう」についての疑念を提起しておく。

桂宮本では「艶」が七ヶ所、「ゆふ」が一ヶ所みえる。ところが京大本、天満宮本では次のような異同をみる。

諸本／頁	桂宮本	京大本	天滿宮本
九六	ゆふ	艶	ゆう
九九	えん	えん	ゆう
一〇三	艶	艶	ゆう
一一〇	艶	艶	ゆう
一一一	艶	艶	ゆう
一一六	艶	艶	ゆう
一二七	艶	艶	ゆう
一四三	艶	艶	艶

(注) 頁数は桂宮本

桂宮本における他の評語の出度数は、おも影四、幽玄二、餘情一、有心二、うちひらめ四で、「艶」の七はきわだつて多い。しかし表に示すように、桂宮本の七ヶ所の「艶」は天満宮本では六ヶ所までが「ゆう」となっている。一方、天満宮本にも「艶」が一ヶ所だけあり、又、桂宮本の「ゆう」が京大本では「艶」であることから、誤読あるいは誤写による異同とは考えられない。

「歌論における優の概念はなかなか明確にしがた」く「遠島御歌判詞には三ヶ所に見える」。「優」は、例えば芝草句内岩橋（本能寺本）、宗長百番連歌合、矢嶋小林庵何人百韻などの注文には見い出すことができない。ところが、「艶」は芝草句内岩橋に十二ヶ所、宗長百番連歌合に四ヶ所、壬生宛自注に一ヶ所みられ、心が「さゝめごと」に「この道に入らむともがらは先づ艶をむねと修行すべき事といへり」と説くように、「艶」をむねとすることが連歌修行の基本であった。かゝる点から云えば、自注本の性格としては「艶」がふさわしいと思われるけれども、これについての結論はこゝでは明確にしがたい。

注1、壬生宛連歌自注は付句一〇二句。興津宛連歌自注と重複する例句は「いはしとおもふこゝろもそうき／ともかくも人こときかぬ宿もかな」の一句のみ、八〇歳以降の成立。

注2、宗長手記（類従本）天理本。大永三年。

「有馬の湯治のついでに。見屋寺にて。しなかとりゐな野をゆきのあした哉 有明やそらに霜かれのはなすゝき」

注3、宗長手記。「かねて立願の事ありて。當宮にをいて千句。

宗碩法師さそひくたし：毎日二百韻両吟」

注4、法楽千句をはじめ、光貞、橋村新次郎清正興行の一座に出座したり（さののわたり）、西行谷見物等、積極的に最後の伊勢の旅を味わっている。

注5、大神宮法楽千句

注6、三河下り（国会図書館本、野坂本平松本）

注7、実隆公記六月廿三日条「宗長有書状、當時在伊勢国山田云々」

注8、宇津山記。那智籠免句詞書（北野神社本）

注9、再昌草八月廿四日条「宗長法師伊勢国にありしに文つかはすとて」

注10、伊勢千句。再昌草七月十五日条。さののわたり。

注11、宗長日記十二月。

注12、再昌草六月十四日条「宗長法師たよりにつけて伊豆国熱海の湯に入てあかるとて柱にかきつけしとて」

注13、古典文学大系「歌論集二六二頁」

校異表

(注) 1、頁数・行数は桂宮本による。
2、〇印は桂宮本と同一なることを示す。
3、×印は桂宮本と異なり、天満宮本あるいは京大本に欠くことを示す。

頁・行		桂宮本	天満宮本	京大願原本
95	2 春部		×	×
6	こそとやいはん今年とやいはん		×	○
7	山も霞て今朝はみゆらん		×	○
8	に 其		ともに	ともに其

6	6	6	5	5	5	4	3	3	2	2	96	12	12	10	10	10	9	9
なくまみ侍成へし	にて	そしらむ	まきはらむ人	にも	にては	たひく	前句に	つけて	ゆふの	心詞	ふつゝかに	前句	恋する	本歌本説の	とり合す	しらるゝ	(本歌)にても	前句
なくさみ侍ぬへし	○	そしらむ	×	に	にや	たひに	前句	つけ	ゆう	○	ふくらかに	まい句	おふする	そのゆへある	○	×	×	○
なくさみ侍ぬへし	にして	そしらむ	○	に	にや	○	前句	つけ	艶	詞	○	毎句	応ずる	○	より合す	しるぎ	×	前句に

98 10~12	11	98 6.5	14	12	11	7	7	4	1	1	97	14	96 14	14	10	9	9	7
思ひしに……と云歌 の心にや	山と思ひしに	こませし	山木	日くるれ	岩なき	心も	句は	人の	よせにや	たれて	うれふ	月日の	あはれふ	雪	にか	やらう	立枝の	やとはとはまし
×	山といふ哥あるへし	こさせし	まさ木	○	光なき	○	○	人	○	○	うれふるなる	月日	あはれふ心	○	○	様	立枝	やとやとはまし
×	山といふ哥あるへし	こさせし	まさき	日くるゝ	光みぬ	心	句	人	よせとや	たれ	うれふるなる	○	あはれふ心	×	×	やうう	立枝	やとやからまし

11	7	7	7	3	2	100	12	12	10	8	8	5	5	2	2	2	1	12	12
也	はては	旅たち	枝そ	羽かすかにて	散ぬ		夕には	聖山の神女か	雲	人の思はぬを	をそく	候	むくゐ	もや	えん	すかたも	詠たる	風の	なれと
なるへし	つゐには	旅たつ	枝に	かすかにして	ちるな		「には」破損のた め不明	巫山 神女	人	人の思はぬは	をそくとひ	たり	むくひ	や	ゆう	○	○	風	○
○	○	旅たち	○	て羽音かすかにし	○			巫山 神女	○	ぬは 人のおもふ思は	をそく	○	むくひ	○	○	すかた	詠めたる	風	なれは

14	10	10	7	3	3	103	13	11	8	7	3	102	10. 12	9	8	7	5	101	13	12
とゝまるといふ	やう	納涼に：一句	艶	なり	也	卯月のまつりのことなり	卯月の賀茂祭都のみち	ふつゝか	7・8	夏部	棹すさ	つらふ	なり	程や	らに	手	あはゝ	すもりに		
とゝまれとといふ	様	×	ゆう	いふなり	なるへし	卯月まつりのこと	卯月賀茂の祭都ち	ふくらか	8・7	×	棹こす	つとふ	なるへし	程は	まに	水	あらゝ	すもりと		
とゝまるといふ	さま	○	○	○	○	卯月のまつりのことなり	卯月賀茂の祭都みち	○	8・7	×	棹こす	つとふ	なるへし	程は	まに	水	○	○		

10	10	9	6	5	106	13	10	6	3	1	13	10	104	7	7	6	4	104
はかなき	あはれふ	おもしろかる	やと	あくるまの霧	にて也	妻・ことも・あや	也	森の秋の初かせ	秋部	侍らは	澤へなる：今日哉	成へし	わかぬる歌のよせ	心なき	水うみの	あへ句歌	ゆうけんに	からの
あたる	あはれむ	おもへる	○	あくるまの露	にてあやにといふ	霞・ことも・あやに	にや	森に秋は来にけり	×	侍れは	×	よめるよせあるへし	わかぬるとこ夏のと	○	かきくもる	あへる歌に	れうけん	○
あたる	○	○	と	あくるまの露	にてあやといふ	○	にや	○	×	侍れは	×	○	入たるなる	心なきといへる さまも有へし	かきくもる	あへる歌に	了簡	から

1	11	10	7	3	105	13	10	10	10	7	6	5	3	107	14	12	11	11
に11行と12行との間	思へは	侍るなり	かねぬる	月空	ころ	つまも	から紅のふりいて そ鳴となり	るの	きり／＼のこゑふ ふり出てなかは	うら紅	色に	しめて	やう	草にむしの音の	みえたる	ゆふかけ	也	けにあたなる
次頁の2・3・4 の三行が入る。	○	侍	かねつる	月の都	そら	つまに	から紅のふりいて そ鳴といふなるへし	るの	きり／＼のこゑふ りいでてなかは	から紅	色々	○	様	草々むしの音	○	とふかけ	なるへし	けにははかなき
天満宮本に同じ	思ふは	侍る	○	月宮	そら	○	から紅のふりいて といふなるへし	○	きり／＼のこゑふ り出てなかは	から紅	色々	しみて	さま	草々むしの音	みえぬる	とふかけ	なるへし	けにははかなき

13	12	9	8	6	1	1	12	11	9	8	7	6	5	4	4	109	14
侍るにや	艶	歌あり	かたわれ	なかはに	よろしきにや	成へし	うたゝね・されて	いなつまに	やへむくら・取所 なる	心も	雨露も…夜は秋を わするゝなり	しけき	とまらぬ	衣を	さやかなる月に	人やかはりて打明 す	松風
○	ゆう	歌あるにや	かたはれ	なかはの	よろし	なり	うたゝねは・され	いなつまの	×	心	×	しけさ	たまらぬ	衣	月さやかなるに	人にかはりて打 すむ	松の風
侍るや	○	歌あるにや	かたはれ	なかはの	よろし	なり	○・○	いなつまの	×	○	雨露の…夜はあれ たる庵の秋を わするゝとい ふ心にや	しけさ	たまらぬ	○	月さやかなるに	人にかはりて打 すむ	松の風

113	13	12	11	9	8	7	7	4	4	112	12	11	6	5	2	2	111	14
いぬふ事にも いはんにも	色に	なく・宿	なき	ゝいへるも	也	此世の契	月をみて・おき つゝ	椎柴など	露より	気色	ちらすまも	名にはあらす夕の 草なり	いかゝ	行心をくらさは	さひて艶なるへか らん	みるにや	きぬた	松
ぬふに・○・○	色と	ある・その	○	いへるも	あるへし	此契	月をみつゝ・おき ゐて	○	露に	景気	ちらまくも	名草にはあらす夕の 草むらなるへし	○	は行心をくらさは	さひしゆうなるへ からん	みるや	持衣	秋
ん○こと・いは	色と	ある・○	なく	云	あるへし	此契	○・○	椎柴と	露に	○	ちらまくも	名にはあらす夕の 草むらなるへし	いかに	は行心をくらさは	さひて艶なるへ し	みるや	持衣	秋

14	なり	なるへし	なるへし
14	なと	山川のなと	○
13	二夜と	二夜を玉ささのと	○
13	水	氷	こほり
10	かへさん	かへさんといふう たの返しにや	かへさんといふう 歌のかへしにや
10	鶯の	×	×
9	かへさん	○	かへらん
6	たる	つる	つる
4	やらむへ	やらむ	やらむ
3	木枯を冬	木枯の風を色々	木枯の風を冬
114	2	破損のため不明	○
12	冬部	×	×
11	十日・也	十月・○	○・×
10	折枝に	おりえたる	おり得たる
7	題にて	題のうたにや	題の歌にや
6	6・7・8	6・8・7	6・8・7
6	ぬれたたる	ぬれたる	ぬれたる
6	みて	おりて	○
3	ほめたる	ほめたる事	ほめたる事

9	いくこと	いく重	いくへ
7	木絶く……細代	×	○
7	うちの川霧	うち河の霧	○
6	細代・しらすも	あしろ・しられす	あしろ・○
5	よる・云也	うかへる・云り	よれる・いへり
117	2	かゝる所……侍らん	かゝる……侍らん
10	月より時雨の	月よりをちの時雨	月よりをちの時雨
10	月に……思ふにや	×	○
10	詠る	詠るにや	○
7	とも	と	○
7	艶	ゆう	○
6	いひたる	○	いひ出たる
6	きよみか秀司	きよみと秀句	きよみと秀句
116	6	立歸りて嶋を	又立歸りきなく
11	やうとくなる人・に	うき人・也	うき人・也
11	といふ人	くる人	とふ人の
9	人は	人も	人も
7	時雨はひまもなき を云也	時雨ひまもなしと 云なるへし	時雨はひまもなき を云なるへし
115	3	とをく	×

120	2	12	11	10	6	5	3	2	1	1	1	11	11	8	7	118	12	11
	おほつかなきにや	恋部	詠玉	庭火は	半天雲	ゆきは	今そしる……思や れとも	心の跡もなきや	雪に	哉らん	雪かな	野山をみすはと	雪駒	也	さひしき	さま	住吉の	間より
	おほつかなき也	×	詠曲	庭火も	半天の雲	ゆきや	一行目に入る	跡もなきにや	雪	哉らんある歌の返 しに今そしる…… 思やれとも	庭の雪かな	雪をみすはと	雪に駒	にや	さひしき	×	×	間に
り	おほつかなきな	×	詠曲	庭火も	半天雲	雪や	一行目に入る	心は跡もなきに や	雪	やらん有哥の返 しに今そしる…… 思やれとも	庭の雪かな	野山をみすとは	○	にや	○	×	×	まより

8	8	7	122	11	11	7	5	3	121	14	14	14	13	12	10	10	3	2
あやまり	用心を	侍らめ	あふよを	かたければ・付る	よの・云成へし	妹にこひ	宿なき雨は	よとともにつね	中の	也	くるにや	なか立て	夜は	岩	也	其面	古き歌見侍らすは ：へからす	は必心を いかにしはかりに
あやまち	用心	侍らめと	あふよをも	かたけれど・付ぬ	よはの・云へし	妹に	宿なく雨も	よとともは・つね	○	云なるへし	○	おり立て	夜の	君	いふ也	其面影	×	にいかせしはかり には必
あやまち	○	侍らめと	あふよも	○・付ぬる	○・いふへし	妹に	○	よとともにつ ねに	中を	いふへし	くる夜にや	おりたちて	○	きみ	いふなり	其面影	古き歌見侍らすは ：へからす	にいかせしはかり にはかならず

8	7	5	4	1	125	14	13	10	6	13	12	11	7	6	6	5	123	12
とりかくす・文そ	とりかくす文も	はかなぎ	ひたすら	たえねと	はかなぎのみは	なと祈侍て	玉のをよ	哀をも	つらき	わか	君	月を	よなくの・にや	こゝろに	一方に	とまる	いさしらぬよし	しあふ
とり返す・文そ	とりかへす文を	はかなぎ	○	たえね	はかなぎのみを	祈侍にて	玉のをに	哀を	つらき	われ	恋	月	よなく人の・や	こゝに	一方の	とるま	筆さしぬらし	破損のため不明
そりかえす・文	とりかへす文も	はかなぎ	ひたすらに	たえね	はかなぎのみは	なと祈侍にて	玉のをに	哀をうち	つらき	○	恋	○	やよなく人の・	こゝに	一方の	とるま	筆さしぬらし	

3	128	14	14	9	6	127	12	11	11	8	7	5	4	126	14	13	13	12
行目とふけしき…6	雑部	やう	如此の句艶	督の君	なかるゝ	なと・たる	あるにや	みうき人	ひま・夢そ	契は	にくからす	たのめし	あさむきたるこゝろも有にや	思ふ	歌も有へし	我を君には里	にや	遇不逢
7・8行は三元頁の間に入る	×	様	如此句にゆう	督の	なかるゝ月日	○・たる也	あり	又うき人	さま・夢	契や	にくからすや	たのみし	あさむきいふこゝろもあり	思ふ人	月の内のかつらのことき君にもある哉	我を君にはのうらと	と	逢不遇
天満宮本に同じ	×	さま	如此の句に艶	○	なかるゝ月	×・たるなり	あり	又うき人	さま・夢	○	にくからすや	○	あさむきたるこゝろもありや	○	なり	我を君は、われをきみなにはの里	にやと	逢不逢

12	10	3	3	130	11	11	11	8	5	2	129	14	14	14	10	9	6	4
わたらし	名に	道門の	あやしき小家	いかゝ	をたまき	侍らん	あれとも	舟詠よと思はてゝ釣	にや	子規きかまほしき	おとろかしては	いとひせん	山に尋入	きこえさらん山に	社すれ	にや	先なけれぬあな	侘て
わたらしと	名は	道門の道	あやしの小家にも	いかに	をたまきは	侍らん	侍れと	×	なるへし	郭公のきかまほし	おとろかして	いとひやせん	ねきこえぬ山にたつ	ねきこえぬ山にたつ	する哉	へし	×	なきて
○	名は	道門の道	あやしの小家に	いかに	をたまきは	侍らん	あれと	○	○	時鳥のきかまほし	おとろかして	いとひやせん	きこえぬ山に入	○	○	るへし	○	○

133	14	12	11	8	5	4	132	12	11	3	5	5	4	3	1	131	12
しろき	きても	と	都へ来て	にや	といふ同し	間いふはかり・露の	たれも・名の	此世住かたきこと	いかはかりつらからんも	にや	さらめや	夕里のかたはし	しみぬ	ふかき	今日の夕暮明日の明はのといふ歌なとも有へし	夕煙・といふ	かなしひ
しろし	来りても	○	都へ来りて	なるへし	しりそくといふ詞	いふはかりの・露の間の	○・名を	此世の住かたきは	いかはかりつらからんと	○	さらんや	夕暮里のかたはら	しらぬ	ふかみ	蓬生にいつかおくへき露の身は今日の夕暮明日の明は	夕の煙・○	かなしひ
○	○	とは	宮古人きたりて	なるへし	詞しりそくといふ	いふはかりの・露の間の	たれと・名を	は此世の住かたさ	いかはかりつらからんと	×	さらん	夕里のかたはら	しらぬ	○	×	夕の煙・にやといふ	かなしひ

8	4	4	1	1	135	12	10	10	5	4	134	14	10	5	5	4	3
あまたをはわたせる	輪廻	ことく	野遊を云なるへし	まもなしは	花の下	篠分は…かはらよ	ともと	風はけしき	かも	哉 塩みては…霞春	みらくはく文字そへ字	あへぬは	也	にや	なれなし物をなれにし人をなれなしと	よそにみるたにさひしき物をなれにし物をなれにし人をなれなしと	3・4行間に下の一行を欠く
あまたあるを八わたせる	輪廻し	ことに	興遊を云いつる	まもなし以下破損のため不明	花の本の	×	とも	はけしき	なり	みつしほにかくれぬ塩みては入ぬる磯の…かすむ春かな	見らくのくもしはそへ以下破損のため不明	あへぬ	にや	なるへし	それそかれそなと	思ひやるたにかなしき物をそれそかれそなと	遠寺の雲の眺望なるへし
あまたは八わたせる	○	ことと	興遊をいひいつるなるへし	まもなしに	花のものとの	○	○	○	○	塩みては…こふらくのおほゆ	見らくはくもそへもし	○	にや	なるへし	それそかれそなと馴にし人を	おもひやるたにかなしきものをそれそかれそなと	遠山寺の雲の眺望なるへし

3	138	2	12	8	4	137	13	9	8	8	4	4	136	14	14	11	8	8	185
千年を	や年の暮しれ侍るに	いさみ	にもとこそ覚侍れ	侍るにや	侍るにや	岩の・更に・山伏	かきね	中多のことにこれ	なくさめに	筆に	むつまし	人も	いかならん	かくれあらはれ	南北禱衣	也	なり	侍る	糸
千年も	歳暮にてしられ侍り	いさみもいそきも	にこそとおほ以下破損のため不明	侍るや	侍るや	○・更・山伏の	かきうち	中に絵のことに是	御なくさめに	○	むつかし	○	たれならん	云はかくれ顯れと	南北の禱衣	破損のため不明	○	侍るにやこれらは	國
千年も	歳暮にてしられ侍り	いさみもいそきも	え侍り	侍るや	侍るや	×・○・山伏の	垣内	中にこれはいと	御なくさめに	筆にも	むつかし	人にて又も	たれならん	これはかくれあらはれといふ	北南禱衣	なるへし	にや	侍るにや此等は	國

141	13	10	10	5	5	140	2	14	10	7	5	4	139	1	14	12	11	8	8	5
ゆきしき	野寺	我・誰か・にも	ひとりこと我あらましと	なくさめ	も心	下句これらや句様	なと	入ぬへき	以外	・天満・京大本は7・8行の間に	恋しき	朝夕	とちは	とち	おもはすや	かたらひて	事也	巻	千年も	
ゆかしさ	○	我か・誰・かも	ひとりことの我あらましを	なくさみ	様も心も	下句はこれらや句様	と	入なまし	以外の	・雑部冒頭の3・4・5・6の四行が入る	恋しさ	朝夕に	とち	時	おもはすやは	かたらひ	巻の事なるへし	物語	千年を	
○	野寺は	我か・誰・かも	ひとりことの我あらましを	○	句様も心も	下句はこれらや句様	○	○	以外の		恋しさ	○	○	○	○	かたらひ	し	○	○	

9	9	6	5	2	143	2	14	12	8	142	2	11	10	8	7	7	7	6	2	2
さどくつれ出たる	濱	なり	をきて	句のさまも	云心	すてゝ	吹きて	のみは思ふらんと	のみは思ふらんと	立やすらひて出	上は・つみ	よしあしの	やと	年比の	外様	云事も	うし	残すむかしにや	物ゆかしさ	
里人のつれいて	浦	なるへし	をきては	句様も	云	はてゝ	吹来りて	のみ思ふらんと	のみ思ふらんと	立や出	うはさ・悲	ともかくも	と	○	付様	云事	おし	残すむかしにやと	物の床しき	
さてつれ出たる	○	なるへし	をきては	句様	○	○	吹て	のみおもふらん	のみおもふらん	たちや出	○・○	○	○	としころ	付様	いふ事	おし	のこる昔にやと	物のゆかしき	

146	1	11	8	7	7	7	7	4	145	9	6	6	5	144	14	13	12	9
あはれむ	つかへん	旅	様	うつろひたる	夕影草	わひしきと草の枕 にて察したる也	や	句よろしきにや	旅屋に	空	かなしふ都文	忍はんを文をみつ	かなしふ文もうし	かやうの句はたゝ 句の	をかへに	うき橋なとゝいふ ことなり	舟ちの長閑なるは	たひすかたとも
あはれ	○	様	なるへし	うつろふ	たひ枕夕かけ草	○	○	句様宜にや	旅宿	山	かなしむ文やこの 文	しのはんを文をみ て	かなしむ文もうし	彼句はたゝ句	をかへの	うきなといふ事也	舟ちのとかなる	旅すかたとももの
あはれふ	つかへ	○	なるへし	うつろふ	旅枕ゆふかけ草	×	なり	句の様よろしき にもや	旅宿	○	かなしふ都の文	しのはんは文を みつゝ	かなしふ文もな し	かの句はたゝ句	○	うき橋なといふ 事あり	舟路のとかなる	たひの姿ともな と

12	10	10	9	9	9	6	6	5	3	147	14	11	146	8	7	4	4	3
なを	但或自を可用なり	罪咎	如何	なしと	我み	絶ぬ舟や・かなし ふ	行人を・こといみ も	絶さらん	たるにや	舟の・引かけて	ことから	谷みね	みん	夢	さめね	云文あり	時は	はるかにも……つ らからん
我	×	咎罪	○	○	我上	たえぬにや・かな しむ	行人に・こといみ	たえぬらん	侍る也	○・○	ことはから	嶺谷	えん	夢は	さめぬ	云事ありや	時	×
○	×	咎罪	落	なし	我うへ	たへぬにや・○	○・○	○	侍るなり	舟・引かけ	○	○	えん	○	○	いふ事ありや又	時	○

13	9	9	8	6	5	4	150	6	5	4	149	12	11	8	8	5	148	13
詞のよせなり	にや…あれたる様	いふ斗	やははれむ	あはれむ	と云にてや	駒もかへりくるに	を思やる也	をみなへし…云也	名にや	花は・様・立て	たてゝ	名こりはかりの… …あらざらんや	うちなけき侍る心也	てと	てにをは・云の	やう	戸の・聲	ゆくらん
詞をよせ侍り	×	云はかり	をあはれふ	あはれふ	といふにや	駒のかへりくるか	を思ひやるにや	×	名をや	○・○・たちて	立て	三行なし	老をなけき侍る也	×	○・云	さま	○・聲も	○
り ことはをよせ侍	○	云ける	をあはれふ	あはれふ	にて	駒のかへりくるかも	おもひやるにや	をみなへし…云にや	名をや	花に・×・たちて	たちて	○	老を打佐て歎侍るこゝろなり	○	てには・いふ	さま	戸・聲も	ゆかまし

9	6	5	4	4	2	153	1	13	12	11	8	6			152	14	11	10	5
本歌…：朝戸也	のみ	鶯の	興し	發句に	ひかりは	震哉	と	北の藤浪春にあへ	世をうち山と人はいふ也	北野会所…：也	いたつら	發句	如此は	有て	行衛	にそ	頭中將	ひれたりや	あらねとも
本歌…：にやと也	○	鶯や	○	發句	×	破損のため不明	×	×	×	○	○	×	如此の事	な	行末	にて	○	いれたるにや	あらぬ
×	の	鶯	思し	發句	ひかり	○	○	○	入る	9・10 行の間に	いたつらに	×	事は	ありて	行すゑ	にて	中將	いれたりや	あらぬ

155	2	14	13	13	12	12	12	10	8	8	8	6	5	5	3	154	13	10
	にもや	千句	御判詞に候	逍遙院	不可思議	事候	たるへく覚候	夜たゝ	伊勢・也	わかぬと申事也	声もわかぬを	いふ	心をそ、桜	子規	事也	花を	風吹	宿にまたぬか
	にや	×	御判詞に	逍遙院殿	不可思議々	事	也	○	伊勢の・	わかぬとはかり也	方もわかぬを	云る	心を遅桜	時鳥を	はかりにや	花は	風波	宿かまたぬる
	にや	×	御判の詞に候	○	不可思議々	○	○	×	○・×	と申はかりなり	かたもわかぬ	いへる	心を遅桜	○	はかりにや	花は	風波	宿かまたぬる

14	枯たるを そらに	○	○
14	うへしうへはの	○	○
12	種	程	程
11	夕日の	夕日	○
10	かたやとり	笠やとり	笠やとり
10	也	×	申はかりなり
6	秋の眺望・海	×	秋眺望・波
5	夕しくれ……うすきにや	五行なし	○
4	發句に・也	發句・いへり	發句・いへり
156	野風	野	野
2	ななかめしと思ふ秋のさかりを	×	○
13	出は	いてゝは	出て
12	萩を秋	萩を	萩を秋と
10	世の中	世中	世中
10	事	×	はかり
10	清水寺	清水の	清水
6	御萩	萩	萩
3	きよし	○	涼し

157	3	也
7	などの	○
	○	×
	など	

解釈と鑑賞

狭衣物語解釈 (9)

又の日は、所々に御文書き給ふ。色々の紙の、色はだへなどえならぬ、あまた取り散らして、墨こまやかに押し磨りつつ書き給ふ。御手は、「げになどてか少し物の心知らむ人のいたづらに返さむ」と、見ゆるに、御歌どもぞ、なべての人の口付にてだにをかしとも見えぬは、悪しう人のまねびためるにや。

〔口訳〕

次の日五月五日の端午の節句には、中将の君はあちらこちらにお手紙をお書きになる。色さまざまの紙の、その色や紙のきめなどの何とも言えず立派なのを、たくさん取り散らして、墨をこゆく押しすり押しすりして手紙をお書きになる。その御筆蹟は、「ほんとに

10	さむらし	さゆらし
10	也	さゆらし
	なるへし	○

(本学助教授)

本田義彦

どうして少しでも物の情趣を解する人ならいいかげんな返事を書こうか、いや、きつとま心こめて書くに違いない」と思われるほどお見事であるが、御歌などは、普通の人のつくったものとしてさえおもしろいとも見えないのは、聞き伝えた人が悪く誤って言い伝えたのであろうか。

〔注記〕

。又の日―前に「卯月も過ぎて五月四日にもなりにけり」とあったので、ここは五月五日、端午の節句の日である。その端午の節句のお祝いのための御手紙である。

。所々―次の「左大将の御女」「一条院の姫宮」などのことである。

。色々の紙―当時手紙には色々の色の紙を用いていた。
。色はだへ―「色はだへ」という語は、竹取物語以下源氏物語な